

ある詩人像と近代の日本

— 大岡昇平の中原中也論を素材として —

奥田 尚

はじめに

この拙い論考は、『アジア観光学年報』5号に発表する予定である。この『年報』はアジア文化学科が主要な教育の柱としている「体験型教育＝学習」の成果を総括する雑誌である。そこに拙稿を掲載する事情について、まず述べておきたい。

本03年度の学科授業計画の話し合いで、しばらく中断されていた宿泊を伴うバス・ツアーを復活させたいので、その担当をせよということになった。その時点で私が想定していた「体験型教育」構想は、次のようなものである。

本学は03年度からセメスター制を導入するので、演習も春学期と秋学期に分かれる。私が春学期も秋学期も通じて担当するのは2年生用の演習なので、その演習の授業をバス・ツアーと連動させるつもりであった。演習の受講生に行く先の選定をはじめとして、現地の情報の収集とそれを基にしたパンフレットの作製、作製を担当した部分の現地での説明、さらに事後の総括とそこから発展して、各自がそれぞれに独自の課題を発見し調査する自発性に重点をおいた教育＝学習活動を想定した。

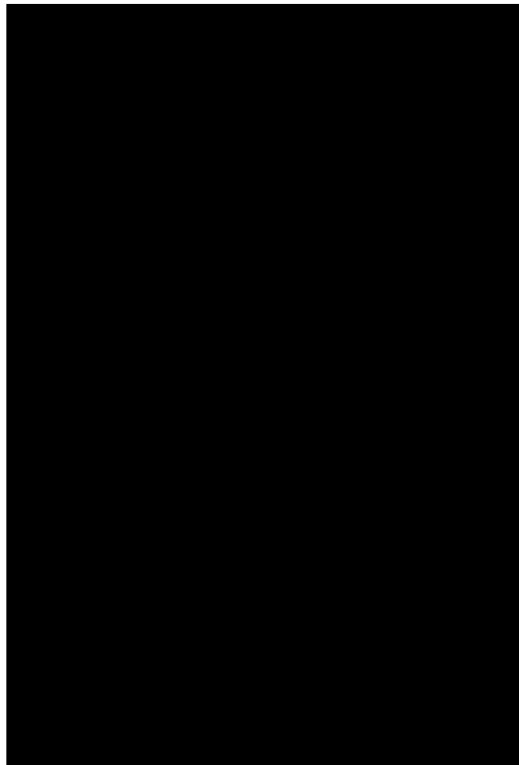
ところが、春学期がはじまってすぐに、春学期と秋学期の受講生が連続して受講を希望しておらず、ほとんどの受講生が入れ替わることがわかった。このために仕方なくバス・ツアーの行き先は教員側で決定することとし、春学期には現地の情報だけを集めさせることとした。しかし受講生の情報機器の操作レベルに大差があり、多くの受講生については自発的な情報収集は無理だと判断せざるを得なかった。

そこで、教員側から一方的に現地に関する情報を流し、それを受講生は教員に指示されながら加工するという、当初の自発性を重視する「体験型教育＝学習」構想とはおよそ正反対の、一方的な従来どおりの情報伝達型の授業とならざるをえなかった。ひとつには2年生を対象とした演習であったことも、一方的な授業にならざるをえない原因であったと思われる。

それはともあれ、バス・ツアーの目的地は山口県としたのであるが、これは中原中也を念頭においていたわけではなく、本学科の「アジア」という地域に関わる目的地の選定の結果であった。山口は宣教師ザビエルの関係から東南アジアやインドと、室町期の大内氏・大内氏の関連で日明貿易、雪舟との連関で日明文化を通じて中国と、近世大名毛利氏・幕末維新の長州藩から世界との関わりも考えることができるからである。こうして山口市、萩市はすんなりと決まった。少し日本史に関係が強すぎるという点から、湯田温泉の中原中也、津和野の森鷗外・西周を訪問地に加えた。

このようにして中原中也つまり「中原中也記念館」が現地見学先に加わった。中原中也は私どもの年代で文学部へでも行こうかと考えたような者たちにとっては、太宰治などの小説と同じく、その詩くらい知っていなければ恥ずかしいという存在であった。ただし、馬齢を加えるといまさら「中原中也」というのが、恥ずかしいような感じがして、当初は訪問地から外していた。このあたりの感覚は、多くの詩人にとっても似たようなものらし

い。2、3例を上げよう。医者で詩人の岡井隆の1974年の文章をまず引用する(1)。(以下、引用文中の〔 〕は、注記しない限り奥田による注記である)。



新潮社『日本文学アルバム中原中也』
(1985年9月)

若いころ、とてもたまらず好きだった此の詩〔中原中也の「秋の愁嘆」〕を、四十代も半ばすぎて読むとき、いくらかはけ恥ずかしい気持ちが混じるかと怖れていた。しかし、こうして書き写しながら、此の詩はわたしの感受性の上に過ぎた二十五年をほとんど問題にしていないと知って、嬉しくなるのである。

引用文の後半は詩人岡井の感受性のことであり、ここでは関係がない。岡井のいう「いくらかはけ恥ずかしい気持ち」の予感が引用の主眼なのである。中也の詩を経験し、その後に詩などとは分かれてしまった者たちには、詩人として生きてきた岡井のように、感受性を持ちつづけられない。逆にそうした感受性をこそぎ落とし、こそぎ落としつづけ、こそぎ落とし得たからこそ、氣息延々ながらも還暦にたどりついたという感慨さえある。

国際的な免疫学者で、多面的な活動を展開している多田富雄は、2000年に次のようにいっている(2)。

理系の学生だったにもかかわらず、私は昼も夜も中原の詩を読み、ときに耽溺した。

(中略)。はるか五〇年に近い歳月を隔てて中也の詩を読み返すと、私にはあの中原病から治ったときの気恥ずかしいような喪失感ばかりがよみがえってくる。

岡井の「け恥ずかしい気持ち」、多田の「気恥ずかしいような喪失感」をより分析的に述べているのは、1940年福岡生まれの詩人・井川博年である。井川は2003年に次のように述べている(3)。

結婚して子どもができるようになると、私とて生活の心配をせねばならず、妻子を養うために稼がねばならない。そうして年月が経ち、仕事もなんとか一人前にできるようになり、社会の仕組みもわかってき、この世で生きるコツ(中也にはこれがわからなかった)がわかってくると、それと共に中也の詩を読まなくなる。誰でもがそうかも知れないように、私も「中也離れ」をしたのである。

井川は、ほぼ私と同年代であり、私たちの年代の通常の文学少年が、文学と訣れをする典型的なケースとして井川の文章を読むと、「あゝ、そうだったなあ」と強く共感されるのである。

バスツアーでは少しの時間湯田温泉の「中原中也記念館」に寄るだけだから、辞書的な意味での略歴などの情報があれば、それで十分だったのである。ところが10月25日・26

日のバスツアーが無事終了した11月中旬のある日、何の気なしに立寄った古本屋に格安で全6巻の『中原中也全集』が出ていた。格安なのは、現在大部の『中原中也全集』が新しく出版されているためだろうとながめていると、別の詩歌の棚に見事に十数冊の中原中也関連の古書が、これは格安とはいえなかったが、それでも入手可能な価格で陳列されていた。中原中也が手招きをしているようで少し気味が悪かったが、これもめぐり合わせかと思いつべてを購入した。

『中原中也全集』は現在発売中の新版が第4次の編集刊行であり(4)、第1次の全集は1951年4～6月に創元社から全3巻で出版された。第2次全集は1960年3月に角川書店から全1巻で出版された。第3次全集は角川書店から全6巻で、本文部分5巻が1967年10月～68年4月、別巻のみ71年5月に刊行された。現在発売中の第4次の全集は5巻＋別巻の全6巻構成で、95年末から編集事業がはじまり、2000年3月に第1巻、編集開始から8年かかって03年11月までに第5巻までが角川書店から刊行された(各巻は本文篇と解題篇との2冊からなるので計10冊)。まだ別巻は編集中という。

吉田瀬生は、「中原中也研究においては、三度にわたる全集の編纂がそのまま書誌・文献的研究の里程標の意味を持っている」と指摘しているが、いろいろな中也関連の本の文献目録を見ても(5)、これは正しい指摘である(6)。この意味ではおそらくこれからが第4次全集に基づく研究の出現期であろうが、拙稿は中也の詩そのものを対象とするものではないので中也研究の列に入るものではない。

中也には「直接面識のある人たちの中也に関する著述が多く」、「台風の目のように触れる者をいためつけ、自分も傷つき、衰弱していった中也」に関するそれらの著述は、「後につづく世代の中也論の土台となって」おり、また「詩と共にその生涯も興味の対象となる」と、かつて桑原幹夫により整理されたことがある(7)。

桑原はさらに次のようにも指摘する(8)。

また中也の詩と詩人を理解する上で、どうしても欠かせないものに、肉親関係の資料文献がある。中也自ら言うように彼の「全生活」は郷里の親元に生活していた頃のことである。詩人としての後年の中也には、一般人としての生活はない。(中略)。つまり「空」も「時間」もすべて幼少期を送った郷里へと回帰していく性質を持っていた。つづけて桑原が挙げている肉親関係による資料文献は、次のものである。

1 中原思郎『兄中原中也と祖先たち』(1970年7月・審美社)

2 中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は』(1973年10月・講談社)

これ以後に公刊された肉親の著述には、次のものがある。

3 中原呉郎『海の旅路 中也・山頭火のこと』(1976年6月・昭和出版)

なお、1の増補版が次のものという(9)が、新稿の部分もある。

4 中原思郎『中原中也ノート』(1970年7月・審美社)

これ以外にもインタビューに応える形で、中也の末弟の伊藤拾郎が中也について述べているが、まとまった形で出版されたものではないようである(10)。

以上の4冊は非常に詳細な中也をめぐる親族あるいは肉親の記録になっている。これはおそらく上に引用したように「直接面識のある人たちの中也に関する著述が多」という状態に、肉親として実際の中也の姿を述べておかなければ、といった気持ちにさせられた結果であろう。

「私は二十数年来、中原について書き続けている。私がしつこく書くために中原の人氣が上昇したという人がある」、「この意見はときどき亡霊のように、思わぬ時に不意に」現われると書いた(11)大岡昇平は、1966年に次のように記している(12)。

例えば中原家の戸籍謄本を引くというような作業は、友人としてはなんとなくできにくかったのだが、そんな遠慮をしていては、現代の進歩した近代文学研究に慣れた読者に、説得的な伝記を提供することはできない時勢になって来たのである。

こんどは専門家の吉田〔瀝生〕氏に加わって貰ったのもそのためである。トランジスター・テープレコーダーなどという新兵器も利用して、聞き書きを取った。

大岡は、友人と肉親の中也の詩についての印象の違いを、1971年に次のように記している(13)。

例えば右の「おまへはなにをして来たのだと」〔中也の「帰郷」の一節〕という句にしても、東京の友人が考えるのでは、恋愛や乱酒にからんだ悔恨、あるいはボードレー風な悔恨だが、山口県人であり、また中原家の一員たる思郎さんに、この詩句からぴんと来るのは、別だという。

「おまえは東京へ出たくせに、ちっとも出世しないではないか」という意味にしか取れない、という。

中原思郎は、1978年に次のように記している(14)。

中也兄様の詩篇に「骨」というのがありますね。あれにもう一行つけ加えておいてもらったら、生き残りは〔思郎たちのような生き残りは〕、とても楽だったのにとおもいます。例えば、「ボクの骨を、あまり、つついてくれるな、シャブツたり、カジツたりしてくれるな、死んだ骨が、また死ぬる」というような。

しかし、この世の現実では、まだまだ骨シャブリの音がにぎやかです。骨の髄に近づきつつありますが、今後、一層、にぎやかになりそうです。

その騒音の中で、ボクは、「兄貴の思い出」くらい書けといわれて、柄にもなく、中也兄様の顔にドロを塗りながら、ひそやかに騒ぎに加わっています。

現在であれば「プライバシー」という壁にはばまれそうな事項まで、肉親によって明らかにされたことは、相互作用として大岡など中也の同時代人の「中也経験」を公表することを加速したであろうし、そうした公表がさらに肉親たちの中也の思い出の発表を助長したに違いない。

こうして中原中也とその知人や近親たちについては、おそらく類例を得がたいほど情報が開示されている(15)。そうしてそれは幕末・明治・大正・昭和初期を生き抜いた人々の列伝の意味を持っており、中也の詩の理解という範囲を度外視してもなお、近代日本に生きた人間の具体群像として興味深いものである。

私は文学を専門に勉強しているわけではないので、中也についてはむしろ近代日本を生きた人間群像のなかでの個人像という意味での興味がわく。さらに上記のように中原中也という詩人は、大岡によって精力的に紹介され、大岡によって中也理解のガイドラインが作られているといっても過言ではない。そこで大岡昇平の中原中也論を素材として、大岡の描く中也像を手がかりに、大岡や中也の意識と近代の日本について調べてみたい。

一 中原中也の幼少回帰について

中原中也の弟は五人いる。中也は柏村謙助とフクの長子で、1907（明治 40）年 4 月 29 日に山口県吉敷郡山口町大字下宇野令村第三百四十番屋敷（山口市湯田温泉 1 丁目 11 番 12 号）に誕生した。謙助とフクの第二子は 1910 年（明治 43）10 月 29 日に広島市上柳町に生まれた亜郎、第三子は 1911 年（明治 44）10 月 24 日に上柳町に生まれた恰三、第四子は 1913 年（大正 2）10 月 15 日に金沢市野田寺町に生まれた思郎、第五子は 1916 年（大正 5）7 月 31 日に下宇野令で生まれた呉郎、第六子は 1918 年（大正 7）2 月 13 日に下宇野令で生まれた拾郎である。

中也の父の謙助が柏村姓から中原家との養子縁組を届け出て中原姓となったのは、1915（大正 4）年 10 月 29 日のことであった。

五人の弟のうち第二子亜郎は 1915 年（大正 4）1 月 9 日に 4 歳で病死、第三子恰三は 1931 年（昭和 6）9 月 26 日に 20 歳で病死している。

亜郎は父の謙助の命名で、「つぐろう」と読ませたものの、周囲の人々から次第に「あろう」と呼ばれた(16)。中也は亜郎の死去の際の歌を、詩作のはじめとし、次のように述べている(17)。

大正四年の初め頃だつたか終頃であつたか兎も角寒い朝、その年の正月に亡くなつた弟を歌つたのが抑々（そもそも）の最初である。学校の読本の、正行が御暇乞の所、「今一度天顔を拝し奉りて」といふのがヒントをなした。

大岡昇平は、上の部分を引用し、次のように述べた(18)。

この詩稿は残っていないが、さして惜しむには当るまい。それはまずこの年頃の優等生が誰でも試みる替歌の域を出ないものと思われるが、むしろ重要なのは中原がどんなものを書いたかではなく、彼がこれを自分の生涯の重大な事件、詩的履歴の第一歩と見做していたということである。そういう詩的自我を自分で作り、自分の経歴と結びつけて思い出で刺戟し、育んでいたことである。昭和十一年の暮れ、愛児を失って彼の神経が混乱した時、家人はしばしば「正行」の名が彼の口から洩れるのを聞いた。

中原フクは、中也と亜郎について、詳しく語っている。これは村上護の聞き書きであるから、村上の興味ある部分は詳しくなるせいであり、村上が中也が詩作の最初と位置づけている亜郎の死をめぐる中也の姿に興味を持っているためである。フクは、亜郎の誕生と中

也について、次のように述べる(19)。

中也はあのとき三歳になっておりましたが、亜郎が生まれたことをどう思っておりましたろうか。親をとられたような気がして、しょげる子どももおるということですが、中也はそうでもなかったようでした。私の母がいて、ひじょうに可愛がっておりましたから、あんまり難儀でなかったんでしょう。

中原中也には「三歳の記憶」【『在りし日の歌』所収】という詩がある(20)。

三歳の記憶

縁側に陽があたつて、

中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は』
(1998 年 6 月・講談社学術文庫)

樹脂（きやに）が五彩に眠る時、
柿の木いつぽんある中庭（には）は、
土は枇杷（びは）いろ 蠅が唸（な）く。

稚厠（おかは）の上に 抱へられてた、
すると尻から 蛔虫（むし）が下がった。
その蛔虫（むし）が、稚厠の浅瀬で動くので
動くので、私は吃驚（びつくり）しちまつた。

あゝあ、ほんとに怖かつた
なんだか不思議に怖かつた
それでわたしはひとしきり
ひと泣き泣いて やつたんだ。

あゝ、怖かつた怖かつた
— 部屋の中は ひっそりしてゐて、
隣家（となり）は空に 舞ひ去つてゐた！
隣家（となり）は空に 舞ひ去つてゐた！

〔引用中の（ ）は初出時によるルビ、（（ ））は『中原中也全集』によるルビで原文では（ ）が付されているルビである。以下、直接に本稿が引用する詩のルビについては同じ。〕

大岡昇平はこの詩について、次のようにいう(21)。

人が三歳の記憶を残しうかどうかは問題であろう。後の記憶が前の記憶を蔽うのはよくあることであり、我々はまずこの詩に何ら「伝記的」価値を置きえないのであるが、むしろ重要なのはこの詩が記録として正しいかどうかということではなく、彼がここで組立てた画面が三十歳の彼の心であるということである。彼が自ら造った童話的自然に酔い、「ひと泣き泣いてやつた」という無償の行為に喜びを見出そうとしていることである。むしろ彼はこれが人間に許された最も純粋な行為というであろう。

大岡がこう主張するのは、大岡が中也の詩について、「彼の詩が『朝の歌』の倦怠から発して、『修羅街輓歌』の対世間苦悩を経て、人生からの一種の乖離を示してくるに一致して、彼の追憶は、少年時の覚醒からさらに遡って幼年時の仮睡に入っていく」という評価の実証のためである(22)。

大岡は前引の部分で、「彼がここで組立てた画面が三十歳の彼の心であるということである」という、きわめて正しい指摘をしており、この指摘は中也の詩を理解するための原点といえる。にもかかわらず、大岡は次に引用した部分の「人生からの一種の乖離を示してくるに一致して、彼の追憶は、少年時の覚醒からさらに遡って幼年時の仮睡に入っていく」という点を重視し、いわば「幼少時の仮睡」つまり幼少時への退行が中也の詩の本質であるかのごとき評価をする。

たとえば大岡は、こういう(23)。

しかも彼が死の前頃こういう自覚「現実的な理想家気質」が自分にはあるのではない

かという中也の自覚〕を自分の幼年時代の記憶とわが子の映像の裡に探さなければならなかったところに彼の弱さがあり、不幸があった。現実、彼自身の現在を含めて、彼には常に不当に見え、醜悪に見えた。「人間は、醜悪なものだ。然るに人々はさうは思つてをらぬ。かくて人生は、愚劣なものだ。詩の世界より他に、どんなものも此の世にあるとは思はない」と彼は死の五か月前に書いている。これが人のよくいう彼の人生からの「乖離」の意味であった。

中也の「弱さ」と「不幸」は、自分に関する自覚を「自分の幼年時代の記憶とわが子の映像の裡に探さなければならなかった」ところにあると大岡はいうが、探す「幼年時代の記憶」にしても、「わが子の映像」にしても、それは中也が組立てた「三十歳の彼の心である」はずであった。

大岡がこの考察のために引用している中也の文章は、次のようなものである(24)。

その後四つ五つとなると、私は大概の玩具よりも遥かに釘だの戸車（とぐるま）だのケサンだのを愛するやうになるのだが、それは何かうまく云へないまでも大變我乍ら好もしいことのやうに思はれてならない。何かそれは、現実的な理想家氣質 — とでもいふやうなものではないのか。

中也がここに「我乍ら好もしいことのやうに思はれてならない」というのは、これを中也が書き記した時点、つまり 30 歳の時点のことである。30 歳の時点での好もしいことを幼少時の記憶のなかに探していることは明らかであるが、幼少時の雑多な記憶そのもの自体が 30 歳の中也にとって好もしいわけではない。記憶はその記憶を呼び起こす刺激に対して意味のある形で再現されるものであり、記憶は純粹に客観的に脳裡に刻み込まれているわけではない。

つまり、自覚は 30 歳の中也の中にあるのであり、中也は自覚を幼年時代の記憶に投影させているのは、その自覚が幼年時代から一貫して自己のうちに存在しつづけたことを確認することにより、自分自身の安心を得ようとするためにすぎない。

これと逆になっているのが上引の「三歳の記憶」である。「部屋の中はひつそりして」おり、「隣家が空に舞い去」った恐怖は、三歳の頃に稚厠でうごめいている、自分の尻から出た回虫 — それは自分が自分の中で造り出したムシ — と対面したときに感じた恐怖から一貫して、連続して現在までありつづけている「怖さ」だと確認しているのである。

むしろ中也の文章として重要なのは、上と一連の文章の中の次のような部分である(25)。

陳述（のぶれば）、私は明治四十年四月の末に生まれ、その年の十一月三日に（中略）父の任地なる旅順に赴（おもむ）いたのださうである。（中略）。その後三十年、思へば私の青春は嵐に過ぎなかつた、時々其処此処（そこここ）に陽（ひ）の光のちらついた、詩（うた）さながらではなかつたか。（中略）。扨、茲で私はその旅順時代を終らう。まだ書くことはいくらでもあるのであるが、なにさま記憶のない時のことであるから、あんまり書いて筆力の覚束（おぼつか）ないところを出してもなるまい。いつそ嬰兒（えいじ）時代のことなぞ省（はぶ）いてしまはうかと思ふのだが、何分自分の事といふのは、何から何までいとしいもので、笑はれるとは知りつゝも、まづまづ右の分量くらいは省きも出来ない、— 然しま、あんまりお笑ひ下さるな。

大岡のいうように中也は「現実、彼自身の現在を含めて、彼には常に不当に見え、醜悪に見えた」こともあったに違いない。しかし、ここに引用したように「その後三十年、思

へば私の青春は嵐に過ぎなかつた、時々其処此処に陽の光のちらついた、詩さながらではなかつたか」という自負もあり、「何分自分の事といふのは、何から何までいとしいもので」あった。

脇道に入りすぎたので、元にもどそう。とりあえず大岡が中也の詩作の基本となった絶えざる幼少時の追憶を「組立てた画面が三十歳の彼の心である」ときわめて正しい指摘をしておきながら、同時に追憶を「彼の詩が『朝の歌』の倦怠から発して、『修羅街輓歌』の対世間苦悩を経て、人生からの一種の乖離を示してくる」と整理し、それに伴い中也自身が「少年時の覚醒からさらに遡って幼年時の仮睡に入っていく」と、あたかも中也が幼児退行をしているように評するのに異議をとくなえたいのである。中也にとって自分の少年時と幼年時への追憶は、現在の自己には自己の誕生から一貫した連続性があることの確認であって、退行あるいは逃げ込む場所ではなかったと主張したかったのである。

本筋にもどって、中原フクは、亜郎の死について、次のように述べる(26)。

亜郎はとくに、気のやさしい子供でした。それを中也がいじめるんです。といって、亜郎も負けてばかりはおりません。中也より背も高かったし、頑丈な身体でした。中也はよく胃腸をこわし、熱を出すことも多かったんですけど、亜郎はそんなこともありません。それがかえって安心するものとなり、急に亡くなってしまったんです。風邪をひいて熱が高うて、脳膜炎を起したんです。(中略)。

亜郎が亡くなりましたのは大正四年一月七日でした。中也は学校から帰りまして、裏門で早う帰れ、と呼びながら待っている亜郎はいないんです。やっぱり、あの子も淋しかったんでしょう。レンゲの花をたくさん摘んで帰って、「亜ちゃんにお花をあげようと思ってとってきた」といいながら、毎日お花を、仏さまにいっぱいあげておりました。

あのころ、中也には子供用の自転車を買ってやっておりました。あれに乗って、中

也はお墓参りにも、よういっておりました。

亜郎が没した1915年1月には、亜郎は4歳2月、中也は7歳9月である。中也が先に引用したように「大正四年の初め頃だつたか終頃であつたか兎も角寒い朝、その年の正月に亡くなつた弟を歌つたのが抑々の最初である」と記している。前引にもあるように「学校の読本の、正行が御暇乞の所、『今一度天顔を拝し奉りて』といふのがヒントをなした」という。大岡がいうように、この時の詩作は、替え歌に近いものであろう。

中也の小学校時代は国定教科書の第2期にあたる。老人が小学校の教科書の一部をいまだに記憶していると自慢して、暗誦してみせるといふような場面には、私も遭遇したことがある。それと共通する暗誦であり、「今一度天顔を拝し奉りて」と口ずさむのと同時に、自作の詩も思い出として、繰り返し繰り返し口にのぼせたに違いない。そうしてそれを口ずさむことは、詩作に生きる価値を見出そうとする中也にとって、自分の生き方の一貫性を強く自分に認識させる行為であった。

旧版『中原中也全集』Ⅰ

(1967年10月・角川書店)

大岡は中也について、次のようにもいっている(27)。

必要に従って生きること、つまり普通大人になるために、我々が身につけなければならない知恵や習慣などは、中原にとって尽くうつろな、偶然に任せられたものに映った。

中原は小児の世界に止まろうとし、実際人間的には三十歳で死ぬまでそこに止まって、生活に破れた。そこで彼の精神は言葉を逆用して、言葉以前の世界を構成し、その存在の理由を証明しようとする。

問題は、大岡が「小児の世界」として、どのような世界を考えているのか、その内容である。中也の詩に対して多くの論者が重視している「言葉以前の世界」が何を意味しているかであるが、少なくとも「言葉以前の世界」は「小児の世界」の再構成でありえたとしても、「小児の世界」そのものではありえない。

かつて実在した「小児の世界」に「止ま」ることはいかなる意味においても不可能なのであり、「小児の世界」の再構成を「小児の世界に止まろうとし」たと表現することは、その再構成にかけた人間の営みを無視する、あるいは否定するものである。たとえその「小児の世界」が人間存在の根源であり、文学の根本であるとしても、それは何年だったにせよ他人と共通できる現実を経験した人間が、その経験を加味しつつ再構築する世界なのであり、単に過ぎし日の「小児の世界」などではありえない。

「大正十二年より昭和八年十月迄(まで)、毎日々々歩き通す。読書は夜中、朝寝て正午頃起きて、それより夜の十二時頃迄歩くなり」というほど、ほんとうに歩きつづけたといわれる中也は、おそらく歩きながら何度も何度も小学校の読本の「楠木正行」を繰り返し思い浮かべ、その度ごとにその替え歌の自作の垂郎の死を歌ったに違いない。そうしながら幼少時よりの自らを、詩人として確認しつづけたに違いないのである。

大岡は、中也の詩を次のように当時の詩の傾向のなかに位置づけている(28)。

しかし、昭和初年は「詩と詩論」に代表されるモダニズムが優勢であり、中原は佐藤春夫の『殉情詩集』と共に少数派である。つまり彼は反時代的な方向を選んだのであるが、一部には熱狂的愛読者があった。

中也の詩は当時世間に流行するようなものではなかった。とすれば、中也が自らの位置を確認できるのは、自らの価値評価によってしかない。自らの価値評価は自ら生きてきた「歴史」のなかにしか求められない。幼少時に絶えず立ち戻りながら、中也は詩人としての自己を確認せざるを得なかった。「一部には熱狂的な愛読者があった」ために、回転する自己確認はかろうじて空転ばかりではなく、外部に連関することで安定する回路を持っていた。

もし中也がこの「熱狂的な愛読者」を見失ったとすれば、耐えざる自己確認は無限に空転をつづけ、ついには「狂気」にいたらざるを得ないだろう。そうして絶えず個と外界との関連を見失わせるのが、近代という時代の特徴でもあった。大岡の意地悪い中也への幼児退行評価は、中也が詩人として自らを位置づけつつ個人として生きてきた歴史を否定し、その中で中也が繰り返し行なった外界と個との格闘を否定するものである。それがもし中也の生きていたころにも大岡に見られた中也評価とすれば、中也にとって大岡自体が「近代」と化して、中也を否定しようとかかってくる怪物に見えたに違いない。

二 大岡昇平の「田舎者中原」について

大岡昇平は「田舎者中原」と断定した。大岡は中也にはじめて会った時の印象を、1946年に次のように述べている(1)。

私が初めて中原に会ったのは東中野の小林秀雄の家である。或る日 — たしか三月の初めだったと思うが — 私が入っていくと荒い紺紺に黒の兵児帯をしめた、まず田舎出の学生といった風の若い男が笑いながら何か喋っていた。中原と紹介されて、私はその外貌のあまり平凡なのに驚いた。

ここでは大岡は、中也の「外貌」が「あまりに平凡」であったことをたとえるために、「田舎出の学生」と表現しているようにみえる。ところが、1947年に書き、49年まで発表する機会を与えられなかったと大岡自らが述べている「中原中也伝 — 揺籃」に、次のような部分がある(2)。少し長くなるが引用する。

十九歳、〔中也は京都から〕東京に出た。広漠たる東京にはもはや自然はなく、ただ人間だけがいた。都会人は常に自己を偽り、物欲しげな鼻歌で「現実的な理想家」をあしらった。長い戦いの後に中原は疲れた。

中原が文学以外で交際った友人は皆、彼がいつも望郷の念に駆られていたと伝えている。かつて「ギロギロする眼で諦めていた」故郷の自然の中に、今や彼は休息と慰安を期待する。

心置きなく泣かれよと
年増婦（としま）の低い声もする

あゝ おまへはなにをしに來たのだと
吹き来る風が私に云ふ

しかしこの不安な魂に故郷で安らぎがあったと空想してはならない。親鸞の逆説に感銘して以来、この exchange の腕を持った理想家は、いつも人生を裏返しに表現することばかり考えていたのであって、故郷もいわば彼の不安と苦悩の「裏」の意味しかなかったのである。

しかし自然は人より先にあり、人を取り巻き閉じ籠めている。或る時中原が故郷の自然に見出した意味が何であれ、それは彼の人間の受動的な部分、つまり情念に痕跡を残していた。彼の詩にある一種の優しさと親しさは、榎野川〔ふしのがわ〕の瀬音と姫山の曲線と平行であった。環境が人間を決定するのはここまでである。

以上長々と引用したが、最初の部分に「東京に出た。広漠たる東京にはもはや自然はなく、ただ人間だけがいた。都会人は常に自己を偽り、物欲しげな鼻歌で『現実的な理想家』をあしらった。長い戦いの後に中原は疲れた」とある。中原を田舎者とは明言していないものの、「都会人」との「長い戦いの後に中原は疲れた」というのであるから、大岡の脳裡には「田舎者中原」との評価がすでに出来上がっているとみてよい。これが1947年の段階の評価であるから、46年に大岡が中也の外貌を「田舎出の学生」と記しているのは、すでに大岡のなかに「田舎者中原」という評価が根付いていたのである。

それでもこの段階では「田舎者中原」とまだ明言していないのは、大岡のなかに次のよ

うな思考があったためである。大岡には「望郷の念に駆られていた」中也像があり、「故郷の自然の中に、今や彼は休息と慰安を期待する」と考える。その一方で「故郷もいわば彼の不安と苦悩の『裏』の意味しかなかった」のであり、故郷の自然は「情念に痕跡を残」すが、「環境が人間を決定するのは」そこまでであるという。つまり中也は故郷そのものに「休息と慰安」を求めるが、その故郷も中也が不安と苦悩で再構成した「故郷」にすぎないというのである。ここでのこの評価は、不安と苦悩を抱えた当該時点での中也の姿に重点を置いており、故郷への逃避や退行に重点をおいていない分だけ正しい評価であり、したがって「田舎者中原」とは明言できなかったのである。その大岡の評価の正しさは、大岡も引用している次掲の中也の詩自体からも証明できる。その詩を次に掲げる(3)。

少年時

黝（あをぐろ）い石に夏の日が照りつけ、
庭の地面が、朱色に睡つてゐた。

地平の果に蒸気が立つて、
世の亡ぶ、兆（きざし）のやうだつた。

麦田には風が低く打ち、
おぼろで、灰色だつた。

翔((と))びゆく雲の落とす影のやうに、
田の面（も）を過ぎる、昔の巨人の姿 —

夏の日午（ひる）過ぎ時刻
誰彼の午睡（ひるね）するとき、
私は野原を走つて行つた ……

私は希望を唇に噛みつぶして
私はギロギロする目で諦めてゐた ……
噫((ああ))、生きてゐた、私は生きてゐた！

「夏の日午過ぎ時刻」以下は、少年時の思い出とも、作歌時点での思い出とも両様に解釈できる。作歌時点は、「昭和二年～三年かとも考えられるが未詳」という(4)。「噫、生きてゐた、私は生きてゐた！」も、たとえ少年時代を振り返ったと解釈してみたところで、作歌時点での「私は生きてゐた！」という感慨と二重奏になっていることは否定できない。5連、6連の詩句はすべてそうした二重奏である。

大岡が引用した「ギロギロする目で諦めていた」の「諦め」は、「ギロギロする目」の語感からして「放棄」の意味ではなく、「究明」の意味である。少年時も今も「私は希望を唇に噛みつぶして／私はギロギロする目で諦めてゐた ……」のであり、その少年時の故郷は、

中也にとって逃げ込む場所でも、退行が許される場所でもないのである。

ところが中也の故郷に対する姿勢についての大岡の評価の正しさは、またしても部分的であり、この論考に限られる。大岡が1956年までに書いた文章には、次のように記されている(5)。

田舎者中原の精神が、会話において、自分を表現し、鍛える型であったのに対し、東京の学生は、不断の饒舌と冗談に拘らず、その志を保持することにあったといえよう。少なくとも富永太郎の精神の特徴は、自分を隠すことにあった。

結局大岡は、幼少時の追憶に中也が退行する面を重視したのと同じく、中也の故郷への望郷の念への逃避を重視し、「田舎者中原」という評価を下した。正確に言えば、中也に対する遠慮がなくなって、「田舎者中原」という評価が表面化した。

「田舎者中原」ということについて、村上護は正面から論じた。中也が「いろんな意味で恩人である富永太郎を評しても」、「こうした中原の批評には、田舎者が都会人を見る視線がかくされている」と村上はいう。ただし村上が中也を「田舎者」とする視点は、きわめて単純である。中也が富永を介して知った東京の仲間たちは、「〔東京府立〕一中、一高、東大という進路」の連中であり、「東京育ち」の「エリート意識」をもった連中で、それを「都会人」といつている(6)。こうした東京育ちのエリート意識をもたない人々が「田舎者」ということになる。ただし、大岡の「田舎者中原」評価は、この村上のように単純ではない。大岡は中也の「田舎」性を次のようにも記す(7)。

時々彼〔中原〕は田舎風の気楽さで彼ら〔中也や大岡が永い午後の時を過した「そこの喫茶店か飲み屋」の「表情のないお内儀や娘や」「客たち」〕に話し掛けることがあったが、その話し方は極めて巧みで、偽らざる素直さがあり、相手もつい釣込まれて、この異様な客にかなり立ち入った打ち明け話をしなければならぬ破目になったりした。

この引用は、「昭和三年に連れ立って東京の街をうろつき廻った頃の我々は全く呑気なものであった」に続く部分であるから、大岡と中也が知り合っただけのころの思い出である。ここでは「田舎風」は「気楽さ」の形容であり、その背後には「都会人」なら見知らぬ他人に「気楽」には話し掛けられないはずだという大岡の基準がある。引用は、大岡が自ら「中原中也についてはじめて書いた」といつている「中原中也の思い出」からであり、すでに述べたように当初から大岡は中也を「田舎者」とみていたことを示す補強材料である。大岡がこのような田舎者として中也を思い出す内的動機は、次のような記述にうかがえる(8)。

彼〔中也〕が死んで十年たった今日そうした彼の常軌を逸した言動が漠然とした

『大岡昇平全集』第18巻
(1995年1月・筑摩書房)

一般的な印象しか残っていないのに反し、彼が日常の瑣末事に示した細い愛情、率直な反応、特徴あるしかし健全な判断等、すべてむしろ私の第一印象に繋がる事柄をよく憶えていて、懐かしく思い出されるのである。

ここにいう「私の第一印象」は、すでにこの項の冒頭に引用した「荒い紺紺に黒の兵児帯をしめた、まず田舎出の学生といった風の若い男」という中也像である。この大岡の第一印象の「田舎出の学生」中也像に、すでに大岡の自己を「都会人」と位置づけ、「田舎者中原」に優越を感じる心情が存在する。それは中也に対する大岡のある種の「敵意」といっても過言ではない。たとえば次のような記述にもそれがうかがえる(9)。

当時我々がみな若くて子供だったからだ、一つには「上京した地方人」というものを我々が知らなかったせいもある。私自身に限っていえば、その後新しい友人もずいぶん出来たが、大部分東京で生まれ東京で育った人で、親しく交際〔まじわ〕った田舎の人は結局中原一人である。

東京人同士だけ通じるらしい些細な言葉のやり取り、仕草、それらを知らないために脱け者にされたような感じ、早く符牒に通曉したいという焦慮等々、今から思えば死ぬまで中原から離れなかった一種の劣等感を、私は最近外国を一人旅して、始めて理解したのである。

これは中原の詩と大して関係のない、つまらない生活上の些細事ではあるが、つまらぬことが案外馬鹿にならない。

大岡は「最近外国を一人旅して、始めて理解した」というが、すでに見てきたようにそうではない。大岡は当初から中也の生活態度についての違和感を持っていたようで、大岡の中也に関する実際上の第1作に次のようにある(10)。

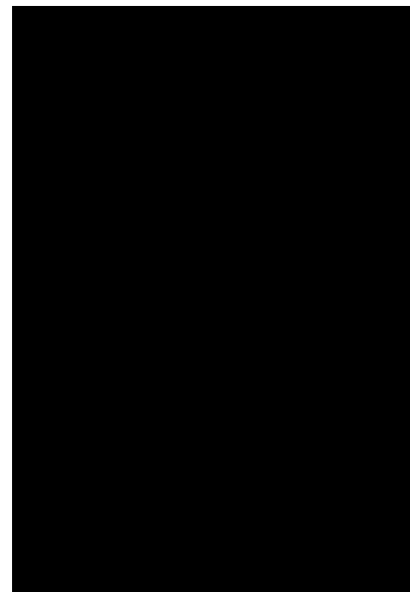
中原は正確に彼の詩が不幸である様に不幸であった。彼の詩による収入は到底一家の経済を蔽うに足らず、止むを得ず詩以外に生活のたつきを得んとして、なし能わざるを求めて輾転する彼の日常は、次第に重い疲労を沈澱せしめる。

大岡自らが中也を論じた第1作とする論考にも、中也の生活が次のように描かれている(11)。

昭和十二年に中原が私に前大戦の名残〔昭和3年の東京の状態〕を説いた時、彼はすでに二児の父であり、詩人の収入が一家の経済を蔽うに足りないのを苦に病んでいた。日中戦争は始まり、巷には彼の平安を脅かす事件が増加しつつあった。その秋彼は死んだが、これは彼のためにむしろ倖せだったかも知れない。その後わが国を訪れた惨澹たる事態に、彼の鋭敏な神経が抵抗できたとは思われない。

中也と金銭について、はるか後の1979年に大岡は次のように述べている(12)。

彼〔中也〕は始終友人に一元、二円の金を貸してくれというんですよ。今の三千元、五千元ぐらいですが、むろん返してくれないんだけど、



小林秀雄『全作品 10 中原中也』

(2003年7月・新潮社)

われわれは彼を尊敬しているから、持っていれば渡すわけですよ。しかしある時から僕は持っても貸さないことに決めました。あれは『白痴群』第五号の同人会の晩喧嘩する前だから、昭和四年の秋でしょうね。その前から仲が悪くなりかけていたんだが、それでも京都へ発つとだれかから聞いたとみえて、送ってやるって、夕方家へ来たんです。なんとかといっても、そういう気持ちなのかと、こっちも悪い気持ちはしないから、一杯やって、晩飯食って、東京駅へ行く。当時は関西へは大抵十時ごろの夜汽車で発ちました。(中略)。

ところが東京駅の窓口で、僕が切符を買おうとして財布を出したら、中原がちょこちょこと駆け寄ってきて、「大岡、十円貸してくんないか」っていうんですよ。僕は手に財布持って札を出しているところですからね、ないとはいえない。向こう〔大岡は京大に在学中〕での生活費もこめて十枚くらいあった。その時は中原のいうとおり一枚渡しましたが、同時に彼とは完全に縁を切ることに決めました。最初からそれが目的だったのです。これは人を欺くものであり、友情につけこむものでしょう。

さらに次のようにも述べている(13)。

この頃〔中也の父が死去した昭和3年5月頃〕から特に臨時費は制限される。下宿も食費も前借りで暮していて、月末為替が届き、支払いをすませると一文なしになってしまう。あとは再び前借りで暮すので、自然友人の家などを歴訪して、酒と食事と小遣いをせびるということになる。友人達はみな中原の作品と談話に魅せられているのだが、次第に重荷になって来る。新しい友人が紹介されると、翌日は中原の訪問を受けるという工合であった。中原のこの時期の歴訪癖、波状訪問は、こういう経済的理由を考慮しないと、真実から離れることになる。

加えて1935年(昭和10)11月に、詩人伊東静雄は自分の処女詩集の出版記念会に出席し、中也におでん屋に誘われて、勘定のときに中也がおどけた調子で「東京では誘われた方が払う仕来りで、ヘイ」と伊東に勘定を払わせた話を大岡は書いている(14)。

ただし、大岡は中原家の経済状態を、中原家は1931年(昭和6)3月以来湯田町の家に戻っており、おそらく一般の景気の立ち直りと1929年の山口町の市制施行による自然隆盛により、経済的には余裕を生じたのであろうとし、1936年に中也が蓄音器を買っていることをあげる(15)。伊東の話は中原家の経済が立ち直って以後のことであるが、これについて大岡は、「現代の百円亭主のように」小遣いが制限されていたのであろうという。

中也をはじめその友人たちの経済状態のことは、大岡の書いたもののなかに散見する。たとえば次のようにである(16)。

若い小林の特色は、まず貧乏ということであろう。(中略)。

小林秀雄の世代は日本文学に強い才能を多数送った世代である。彼の一中の同級或いは一級上には、富永太郎、河上徹太郎、蔵原惟人があり、中野重治、堀辰雄、西沢隆二、高橋新吉、三好達治も同じ世代に属している。指導者とボードレリアンが同居しているのがこの世代の特徴で、そうして彼等はすべて貧乏であった。

大正の成金であった父親達は、この世代で最初の反抗者たちに遭う。第一次世界大戦は終り、大正十年頃から成金もそろそろ左前で、息子の一部をマルクス主義に押しやり、一部をデカタンズに陥れる。貧乏で、ブルジョワを軽蔑している点で変りないのである。

あるいは次のようにである(17)。

富永太郎は中原のように、親から学資を送らせて、女と同棲するような結構な身分ではない。父謙治氏は愛知県の士族、鉄道省事務官、青梅鉄道取締役社長の職を退かれたところである。財産には限りがあり、教育すべき子女は多い。〔太郎が〕学校を止めるのは勝手としても、二十三になっては身を立てる方法を考えて貰わねばならぬ。大岡にあっては「二十三になっては身を立てる方法」を考えるのが、当然のことであり、中也のように親掛かりで生活するわけにはいかなかった。大岡の父は相場師で、大岡が大学を卒業する少し前に破産する。中也と対比して大岡はそのころのことを次のように述べている(18)。

結局たかりということですけども、僕もそのうち親父が破産しちゃって金がなくなっちゃうと、たかられからたかりに変わっちゃうんですけどもね。そのやり方には中原の影響がありました。しかし僕のほうがたかり方が少しうまいから、あいつ、なお怒るんです。

大岡は「たかり」に中也の影響をいうのであり、それもたかり方は大岡の方が「少しうまく」、中也は下手だったという。おそらくこうした評価にも大岡の「田舎者中原」という視点が隠されている。この視点の根本にあるのは、中也と大岡の金銭をめぐる生活感覚の相違であることは間違いない。すでに引用したように小林秀雄をはじめすべて文学をめざす者は貧しかった時代に、大岡だけが一般的な文学者とは異なる生活感覚を持っていたことにも起因する。

大岡は1934年(昭和9)1月か2月に国民新聞に縁故入社し、学芸欄を担当したことに関連して次のようにいう(19)。

われわれの仲間で月給取の経験があるのは僕一人ですが、学芸欄の記者はわりあいみんなに大事にされます。それらがみな、彼の気に入らないのですよ。とにかく僕みたいに自分よりずっと下のはずの奴がしゃしゃり出てくるのが癪にさわる。それだけのことですよ。しかし僕としていやな気がするのは、「玩具の賦」を発表しようとするのが、昭和十一年七月だということです。

引用中にある中也の「玩具の賦」は、1934年(昭和9)2月の作品であり、次のようなものである(20)。

玩具の賦

昇平に

どうとでもなれだ
俺には何がどうでも構はない
どうせスキだらけぢやないか
スキの方を減((へら))さうなんてチャンチャラ可笑((をか))しい
俺はスキの方を減らさうとは思はぬ
スキでない所をいつそ放りつばなしにしてゐる
それで何がわるからう

俺にはおもちゃが要るんだ
おもちゃで遊ばなくちやならないんだ
利得と幸福とは大體は混（まざ）る
だが究極では混（まざ）りはしない
俺は混（まざ）らないとこばつかり感じてゐなけあならなくなつてゐるんだ
月給が増（ふ）えるからといつておもちゃが投げ出したくはないんだ
俺にはおもちゃがよく分つてゐるんだ
おもちゃのつまらないところ
おもちゃがつまらなくともそれを弄（もてあそ）べることはつまらなくはないことも
俺にはおもちゃが投げ出せないんだ
こつそり弄べもしないんだ
つまり餘技ではないんだ
おれはおもちゃで遊ぶぞ
おまへは月給で遊び給へだ
おもちゃで俺が遊んでゐる時
あのおもちゃは俺の月給の何分の一の値段だなぞと云ふはよいが
それでおれがおもちゃで遊ぶことの値段まで決まつたつもりでゐるのは
滑稽（こつけい）だぞ
俺はおもちゃで遊ぶぞ
一生懸命おもちゃで遊ぶぞ
贅澤（ぜいたく）なぞとは云ひめさるなよ
おれ程おまへもおもちゃが見えたら
おまへもおもちゃで遊ぶに決まつてゐるのだから
文句なぞを云ふなよ
それどころか
おまへはおもちゃを知つてないから
おもちゃでないことを分かりはしない
おもちゃでないことをただそらんじて
それで月給の種なんぞにしてやがるんだ
それゆゑもしも此の俺がおもちゃを買へなくなつた時には
寫字器械奴（め）！
云はずと知れたこと乍（なが）ら
おまへが月給を取ることが贅澤だと云つてやるぞ
行つたり來たりしか出來ないくせに
行つても行つてもまだ行かうおもちゃ遊びに
何とか云へるがものはないぞ
おもちゃが面白くもないくせに
おもちゃを商ふことしか出來ないくせに
おもちゃを面白い心があるから成立つてゐるくせに
おもちゃで遊んでゐらあとは何事だ

おもちゃで遊べることだけが美德であるぞ
おもちゃで遊べたら遊んでみてくれ
おまへに遊べる筈はないのだ

おまへにはおもちゃがどんなに見えるか
おもちゃとしか見えないだらう
俺にはあのおもちゃこのおもちゃと、おもちゃおもちゃで面白いんぞ
おれはおもちゃ以外のことは考へてみたこともないぞ
おれはおもちゃが面白かつたんだ
しかしそれかと云つておまへにはおもちゃ以外の何か面白いことといふのがあるのか
ありそうな顔はしとらんぞ
あると思ふのはそれや間違ひだ
北叟笑（にやあッ）とするのと面白いのとは違ふんぞ

ではおもちゃを面白くしてくれなんぞと云ふんだらう
面白くなれあ儲かるんだといふんでな
では、ああ、それでは
やつぱり面白くならない寫字器械奴（め）！
—こんどは此のおもちゃの此處ンところをかう改良（なほ）して來い！
トツトといつて云つたやうにして來い！

（一九三四・二）

中也がこの1934年（昭和9）2月にできている「玩具の賦」を『文学界』に持ち込んだのは1936年（昭和11）7月のことで、それを前引のように大岡が「いやな気がする」といっているのは、「僕はその後『文学界』で文芸時評やることになった。すると『玩具の賦』の異稿を持ち込む。それは不採用になる」という事情があるためである(21)。

「玩具の賦」は詩というよりも、あまりにストレートな心情告白であり、それだけ素直に中也の心情が表明されている。この詩の「おもちゃ」は、「生の意味」ないし「生の意味の追求」といいかえることができる。「月給が増えるからといつて」「おもちゃが投げ出したくはないんだ」というところからは、中也がまったく金銭にこだわらなかったかのように見える。加えて大岡は、中也の生活態度について次のようにも

河出書房新社『新文芸読本・中原中也』
（1991年2月）

いう(22)。

中原のこのような生活態度には、ランボーという手本があったのだが、根本的には金を提供する俗人に対する軽蔑を含んでいるから、一層堪え難いのである。つつましく敬虔に生きる意思を欠き、その感情と欲望の赴くままに日を送っている感性的人間が自然と落ち込む陥穽の一つである。

中也を「つつましく敬虔に生きる意思を欠き、その感情と欲望の赴くままに日を送っている」と評しており、「玩具の賦」から受ける印象にこの評を加えれば、中也の金銭に関わる生活態度は一種「破廉恥」なまでのものがあったように思える。

だが、すでに見たように、この時代の文学者は貧しいのであり、大岡の周辺では「われわれの仲間で月給取の経験があるのは僕一人です」という状態であった。大岡とて父親が破産すれば「たかられ」から「たかり」に転じねばならない。中也の金銭をめぐる生活態度についての大岡の評価の根底を知るためには、やはり大岡自身の金銭をめぐる「生活態度」を調べてみる必要がある。

大岡昇平の年譜を見ると、1916年(大正5)7歳の項に、「母親が産後の入院中に、手伝いに来てくれていた人の財布から遊び道具(メンコ)欲しさに小銭を盗んだ記憶がある」とある。さらに1918年(大正7)9歳の小学校4年生の項には、「小学四年生になって母親の財布から小遣いを盗む癖が復活する。この盗癖は中学まで続くが、このことが後にキリスト教へ帰依する一つの契機となった(「少年」)」とある。大岡が幼少時をこう振り返ることに彼の金銭感覚をうかがうことができる(23)。

大岡の年譜の翌1919年の項には、「この年の春から翌年三月までの第一次世界大戦後の株式投資ブーム(九月に激化)で、父貞三郎の収入が増加」とある。翌1920年3月の項には「十五日、第一次世界大戦中の経済成長の反動で株式大暴落が起こる。『戦後恐慌』の始まり。これに乗じて貞三郎は相場で三十万円を儲けたと言われている」とある。

1922年(大正11)13歳・中学2年の項には、『『新旧合本聖書』を購入して欲しいと父親に要求して拒絶される。結局翌朝母親にお金をもらう。論しにきた叔母蔦枝に父親の職業を非難し、『学校を出たらすべて捨てて牧師になるつもりだ』という(「少年」)」。大岡はその後青山学院中学部4年で静岡高等学校の受験に失敗、私立成城第二中学の4年に転入し成城高等学校に自動的に進学し、京都大学文学部西洋文学第3講座(仏蘭西語仏蘭西文学)に入学した。京都大学の2年生・21歳の1930年(昭和5)の4月の項の末尾には、「この頃、父貞三郎は栄通に一軒、下北沢に姉夫婦の家など二軒、ほかの別宅など五軒の家を持っていた」とある。

大岡家の経済が破綻するのは1931年(昭和6)のことで、この年9月の年譜には「十八日、休暇で〔京都の下宿から〕帰京中、柳条湖事件起こる(満州事変)。十九日より株価暴落。これにより父貞三郎は一挙に財産を失う。親類、知人から預かっていた分も失う。叔父叢に栄通の家を買い取ってもらう」とある。これに続く12月には、「十二月、帰京して朝日新聞社の入社試験を受ける。不合格」とある。

大岡は翌1932年3月に京都大学を卒業するが、徴兵逃れのために引き続いて文学部言語学講座に編入した。しかし6月には徴兵検査延期手続きの不備により、第2次検査を受けることとなり、「第二乙種」合格となり、言語学講座を退学した。9月の項に「小銭が手にあると河上徹太郎と電話を掛け合って飲みに出かけ、店がカンバンになると、青山〔二郎〕

の家に押し掛けた。当時の青山の日記には『もう三時。今夜は河上も大岡も来ない。火を落として寝る』とあるという」とある。「たかり」の時代なのであろう。ただし、同年 12 月の項には、「矢田津世子が二十九日付『時事新報』で『一九三三年に期待される人物』として『まじめな評論家』大岡の名前を挙げているが、後に小林秀雄に『積極的にいいたいことが出てくるまで文芸時評などやるな』と言われて、『作品』の文芸時評を止める」とある。

矢田津世子は坂口安吾との恋愛で知られる小説家で、大岡の年譜の 1932 年（昭和 7・大岡 23 歳大学 4 年）の項に、「加藤英倫〔成城中学・高校の同級生で京大経済学部に進学〕らとよく行った都ホテル前のバー・アリゾナで矢田津世子を知る。この夏、東京のバー・ウエンザーで加藤は坂口安吾に矢田を紹介する」とある。

文芸誌『作品』については、1931 年の項に「河上徹太郎からの手紙で『作品』に執筆を勧められるが、書きたいことがなく執筆せず」とあり、1932 年の 6 月この月の項に「河上徹太郎から『作品』に文芸時評を書くことを勧められる」とあり、10 月 1 日『作品』10 月号、11 月 1 日の 11 号に「文芸時評」を載せている。1933 年 6 月、34 年 3 月・4 月・8 月にも『作品』には大岡執筆の「文芸時評」がみられる。矢田津世子が大岡を評論家と認めたのは、その当初の時期であり、それだけ大岡の評論には見るべきところがあった。

大岡がすでに引用したように「国民新聞社」に入社するのは、年譜によれば 1934 年 2 月で、「月給四十円」とある。5 月に社会部に転じたために長編小説「青春」は、『作品』5 月号・6 月号・7 月号に発表しただけで中断した。翌 35 年 2 月には「新人記者数人と夜勤や宿泊などの特別手当の明朗化を要求して社と対立。『新愛知』〔名古屋の地方紙で『国民新聞』はその傘下にあった〕との電話連絡係に配置替えとなったため、国民新聞社を退社」とある。

次に大岡の経済状態が年譜から分かるのは 1937 年（昭和 12）8 月の項である。

十日、父貞三郎死去。六十二歳。多磨墓地（現 多磨霊園）に埋葬。家督を相続。叔母蔦枝の尽力で、母の死後家に入った妾に庶子（非嫡出子）を引き取らせ籍を除く。家財は処分して親類への借金返済に当て、慶応大学経済学部に進学中の弟辰弥の学費を確保して、一家離散。北沢二丁目二四六番地のもと住んだ家に隣接するアパート晴風荘に転居。父の残した少しの貸金の取り立て分と原稿料で生活する。

翌 38 年 8 月の項には「生活に行き詰まり、中学教師になろうかと考える」とある。同年 10 月の項に次のようにある。

加藤英倫から日仏合弁の帝国酸素株式会社（神戸市神戸区明石町三八番地、クレセントビル内、現、神戸市中央区明石町）への入社を勧められる。加藤の義弟鈴木崧（たかし）（当時神戸支社長）と会う。翻訳係として採用される。帝国酸素は株式の九割をフランス側が持って実質的な経営権を握り、業務上の文書はすべてフランス語に翻訳された。二十九日、横光利一、中島健蔵ら五、六人で送別会を開く。中島健蔵『回想の文学 4』（一九七七年十月、平凡社）に「これだけいい仲間を持ちながら、大岡が文学をはなれていく不思議」とある。

11 月 1 日に帝国酸素に初入社、「月給百二十円」とある。帝国酸素では社内同人誌『鞆鞆 - BLANCO -』を交際費で出したとあるほか、同社に勤務していた女子社員上村春枝と結婚しているから、会社の性格も勤務の内容も大岡と合致していたのであろう。しかし同社に

は太平洋戦争開始後の1942年秋ころから海軍の会社乗っ取り攻勢が強くなり、43年2月にはフランス人役員がスパイ容疑で連行され、入社世話をした鈴木崧も罷免されるなどがあり、同年6月に退社している。

同1943年の年譜には次のようにある。

九月頃、上京して河上徹太郎、今日出海らに就職口を相談。今は日本文学報国会の事務系の仕事を斡旋してくれるが、出征後の留守宅家族手当が支給されず断る。鈴木崧もフランス領事館の仕事を斡旋してくれるが、同じ理由で断る。(中略)。

十一月、七日、鈴木崧の知人、川崎重工の営業部長の紹介で同社に入社。留守宅手当が出る。神戸艦船工場資材部に配属。朝六時二十分に家を出て、湊川通りを歩いて出勤。午前七時から午後五時まで工場勤務。そこでの建艦状況を見て日本の敗戦を確信する。

この間も大岡は『文学界』に評論を書いたり、アラン『スタンダール』(創元社)、スタンダール『ハイドン』(創元社)、ティボーデ『スタンダール伝』(青木書店)やバルザック『スタンダール論』(小学館)の翻訳を出版している。これらの掲載や出版では食べられないという状態であったのであろうが、とにかくにも大岡の場合には、生活のための資金を安定かつ継続的に確保すべきだという、一種の「強迫観念」といってもいいような生活観があったことがうかがえる。

それも上に引用したように、ただその場限りではなく、自分が出征した場合までも考慮して、「留守宅家族手当」がなければ就職を断るといほど徹底したものであり、これは強烈な「家長意識」とみてよい。すでに引用した部分にあったように、父親の死去とともに「家財は処分して(中略)、一家離散」という表現にも、それがうかがえよう。大岡にあっては「家」意識、同じことであるが「家長意識」が強烈なのであり、その意識を持続するためには経済的な裏づけを是非とも必要とするのである。

子供の中の「家」意識ならびに「家長」意識は、各自の育った「家」ならびに「家長」つまり父親を主対象として形成される。もちろん各自の育った「家」をなぞりながら再生産する場合もあろうし、それを否定しつつ新たな「家」を生み出そうとする場合もある。父親に対しても同様であり、父をなぞる場合も否定する場合もある。加えて父の時代と、その子の時代では、社会的な状況の変化がある。したがって父と子は、いかなる意味でも同じ「家」、同じ「家長」にはなれないことはいうまでもない。

大岡の場合を考えると、子供のころに「盗癖」があったことを年譜にまでも載せている。ということは大岡は成人後も、その「盗癖」のことを繰り返し思い出していたに違いない。また「父の職業を非難し」とあるように、投機的な形での金銭の入手を中学生のころに嫌っていた。考えてみれば金銭を盗むことも、盗めればそれでよし、失敗する契機を十分に含む投機的行為である。その際に感じるスリルと悪事を働いているという反「道徳」的な快感が、「癖」となる要素である。したがって「盗癖」の中には、十分に父貞三郎から受け継いだ「投機」遺伝子が認められる。

「盗癖」を自覚することは、一方には「盗癖」をやめようという道徳観を自己の中に形成することであり、それは必然的に投機に対する反感となって蓄積される。そうして父の投機的な職業を嫌悪することにストレートにつながり、着実に労働によって金銭を獲得し生活を安定させるという生活感覚として、自分の生きる覚悟に結びつく。加えて一家を形

成するのが当然であるという「家」意識、自分は長男であり、「家」を継承・発展させるのが当然であるという「家長」意識への大岡の無批判は、この生きる覚悟をいっそう強め、それが強まれば強まるだけ「家」意識・「家長」意識を強化していったと考えられる(24)。

こうした大岡の意識は、近代日本を支えた「勤労者」の意識と評価することができる。実は大岡と非常によく似た意識形成を行なったのが中原中也の父謙助であった。中原思郎によれば謙助の略歴は次のようになる(25)。

1873(明治6)年山口県厚狭郡厚東東(宇部市厚東棚井中)に、父小林八九郎・母フデの次男として生まれた。誕生当時の小林家は数戸の小作を抱える上層中農であったといい、父の八九郎は1877年(明治10)没した小林仙千代の次男で、1845年(弘化2)に誕生し、1871年にフデ(小林家の近くの農家・藤井家の二女)と結婚し、財産の一部を与えられて分家した。分家の前から宇部、山口、下関に放浪し一攫千金を夢見たといい、結婚と分家後も株の取引に興味を持ち行状はおさまらなかった。結婚の翌年に長男が、2年後に長女が、5年後には謙助が生まれたが、1885年には妻フデを離縁し、櫛ヶ浜〔宇部市からは東方の瀬戸内海沿いの徳山市・下松市〕に戸籍を移した。このために謙助は、父八九郎の姉(伯母)ミキの婚家の野村家の養子(第三子)とされた。

謙助は生家小林家、養家野村家、母の実家藤井家をタライ廻しで育てられた。母の実家藤井家の従兄藤井幸八は眼科医であり、小学校を卒業した謙助に勧めて、知り合いの東京の医者(書生)にした。謙助は木製の迷子札を胸に下げて、三田尻港(防府市)から汽船で上京した。

謙助は1896年(明治29)20歳で医師資格試験に合格し、医師免許を取得した。1898年4月に軍医学校に入学し、7月卒業して見習医官となり、軍医としての道を歩む。1900年(明治33)12月に中原フクと結婚するが、中原家の養子にはならないと宣言し、戸籍上は結婚していない状態にする。1901年7月に謙助自ら柏村家(地方の名家で士族)の養子となり柏村謙助となって、中原フク(実父死去のため実父の弟の養女)の養女の籍を抜いて、柏村謙助との縁組により柏村籍に入籍した。幼少時の父の投機的な生活のために3つの家を転々とした苦痛と苦労は、謙助の中に強烈な「家」意識・「家長」意識を育てた。柏村謙助が中原家との養子縁組により中原姓となるのは、中也をはじめ四人の男子が生まれた後の1915年(大正4)年のことであった。

謙助と大岡では一世代異なるものの、父が株取引という投機的な仕事に従事し、謙助はそうした父から実害を受け、大岡はそうした父を批判的に見て育った。謙助は医者という収入を伴う資格を獲得してさえなお、軍医という着実な職を選ぶ。大岡は本を出版したり、作品を雑誌に発表したりして、ある程度の評価を受けているにもかかわらず、会社員という確実かつ継続的収入の期待でき



中原思郎『中原中也ノート』

(1978年10月・審美社)

る職につこうと努力する。

したがって大岡が持っているこうした生活感覚は、中也にとっては幼少時からたえず圧迫をしてきた父謙助の生活感覚と重ならざるを得ない。大岡が月給取りになったということは、中也にとっては濾過されないストレートな怒りを表出せざるを得ないような重大事であった。心を許し、ともに歩むはずの仲間が、自分を圧迫しつづけている「父」になったのである。「父」大岡に対して中也は、自分の大切にしている「生の意味」を、「おもちゃ」として突きつけねばならなかったのである。大岡は「そして最後に私が彼に反いたのは、彼が私に自分と同じように不幸になれと命じたからであった」という。

中也の弟思郎は父謙助の日常生活のひとこまを、「父の夕食は、家族の食堂とは別の部屋に、朱丹の食卓をもちこみ、その上に多様で大量の御馳走を配置」と書き、「夏の刺身は必ず氷の上にのせてなければならなかったし、それはビリビリと振動していなければならなかった。その刺身が魚によっては西洋皿いっぱいになべられ、酢蛸といえどドンブリ一杯あった。それに副ったチシャ葉は前方の視界に影響するのではないと思われるほど山盛りにしてあった」と書いている(26)。

家族とは別の部屋で父が豪華な食事をする、まさに家長を具体化した姿である。この父が中也を日常的にどうあつかったかについて、思郎は次のように述べている。

家族と一緒に食事を早めにすませた母が父の夕食の相手をする。食事の途中、中也は必ず呼び出しをうける。父なき後は中也がこの座に坐るのであるといった意味がある。(中略)。

「二兎を追うものは一兎を得ず」というのは中也が文学に傾きかけて学業を怠りはじめたころの父の酩酊言であった。毎日一回は必ずこれを言った。中也が呼びつけられると、弟たちが「また兎か」といったほどである。中也は心得たもので、時どき「勉強します」という。父はくどく「乞食か、さもなければ勉強か」とくる。中也は「やります」と応じる。最後に「不言実行、ええか」と父は念をおす。そして、中也にも「不言実行」と言えという。中也は「不言実行です」とやる。すると父は一日の行事を完全に了えたという気になって睡気を催す。寝室に行くとき「長男であることを忘れてはならんぞ」という。

思郎はさらに中也の家長意識についても次のように記している(27)。

最近しったことであるが、中也は、昭和八年十二月に三笠書房から出した「ランボオ・学校時代の詩」を、本家中原家はもちろん、遠い親戚にまで贈っている。家系について相当な知識をもっていなければ分からないような古い系累の家で、中也のサイン入りのランボオ贈呈本を発見したとき私は一驚した。昭和八年には、中也は既に正しく中原家の戸主ではあったが、家長意識がなければ、この贈呈本はありえないと私には思われた。

中也もまた家長意識をもっていた。それは夭折した亜郎への感情を「歌」の「最初」と自認し、20歳で死んだ弟怡三を追悼して「亡弟」という小説を書いていることにもうかがえることである。

こうした「家」意識なり「家長」意識なりは、謙助をはじめ大岡にせよ中也にせよ、特別に意識するものではなかったであろう。思郎が描く父謙助像にしても、それは1970年時点の思郎が描くものであり、もはや社会にはすっかりなくなってしまった家長像への追憶

を多分に含むものである。まさにこうした「家」意識・「家長」意識は、1945年8月15日を境としておこったこの国の激変のなかで、死滅していったものであった。

まとめにかえて

大岡は中也が生きた時代の文学と金銭について、次のようにいう(28)。

中原が詩に志を立てたのは、島田清次郎が『地上』で東京を征服した時期に当たっている。大正の成金景気でジャーナリズムも読者は増えていた。文学の志を遂げながら、一家を養い、郷里に錦を飾ることが出来そうな形勢になっていた。一種の天才時代である。それでなければ両親も彼を東京へ離さなかったらと思う。京都でダダの詩を書く一方、中原は小説も書いているのである。

さらに大岡は次のようにも述べる(29)。

第一は中原が親に対して「なんとか恰好をつけ」ねばならぬ位置にあったことである。父謙助氏は軍医の経験の中で、帝大出でないために後輩に先んじられた経験を持っていて、長男中也に最高の教育をさずけようとした。小学校の神童中也にどんなに期待をかけていたかは、中原の残した断片からも察せられるのだが、希望は落第によって挫折していた。好きな文学をやるのは仕方がないとして、そんなら文学で身を立てることが、田舎町で名望ある家の要請であったわけである。

東京に住み、中央の人達と接触していることが、田舎に対しては何者かである。それを中原が意識していたことを窺える材料〔『千葉寺雑記』の内容のこと〕である。たまたに帰郷した中原が、東京の交友をどんなに大袈裟に吹聴していたかは、最近遺族の方々から聞いた。

例えば小林秀雄は三代続いた江戸っ子だとか、青山二郎が青山と名のつく町全部の大地主であるとかといった類いである。それらの政策の一部を中原は面白おかしく我々にも洩らしたが、みな両親から金を引き出して、東京に在住を続けるためだと彼は説明し、我々もそう思っていた。所謂出世が中原の重大関心事だったということは、遺稿を見るまではわからなかったのである。

思郎は中也と田舎について、思郎が中也の死の半年ほど前に中也を鎌倉寿福寺の家に訪ね、すぐ近くで池に落ちたことを記している部分に次のように記している(30)。

中也と妻の孝子は、私の突然の訪問に驚き、ズブ濡れの私に更に驚いた。水中落下の事件を話すと、中也は「田舎者はそれだから困る」といった。田舎者コンプレックスを中也は水の中にまでもちこむのである。(中略)。

それから中也は、私の背広の着方、髪の刈り方などについて批判し、すべて田舎っぺえらしくていけないといい、歯がゆくてたまらないという風であった。

ここに記されている中也の「田舎者コンプレックス」が記されているとおり、中也の生前の性状についての記述だとしても、大岡が「田舎者中原」と「都会派」と対比して特徴づけるほど大袈裟に考える必要はない。

大岡にしてみたところで、父は和歌山県から上京した。富永太郎にしても父は愛知県から上京した。中也の母フクは横浜の生まれで、その父中原助之は山口から上京し、三田塾に学び横浜に住んで死去した。まさに「三代続いた江戸っ子」は珍しいのであり、「三代続いた江戸っ子」だからといって、大岡のいう「都会派」とは限らない。田舎者といい都会

人といっても、中也の生きた時代にはまだまだ取り立てて指摘するほど差異は定着したものではない。

大岡の精力的な中也の評伝は、述べてきたようにやはり一方的なのであるが、詩を論じる論考は別として、中也の生き方を論じた本はほとんどが大岡に影響されている。まったく大岡を念頭に置かない本としては、安原喜弘『中原中也の手紙』がほとんど唯一といってもよい。

そこにはたとえば「僕が言ふまでもなく、学校はチャンと出てをいた方が好い。世間はオホザッパで、学校に出られれば出るにこしたことはない、僕にしてからが思ったりする」とか、「借金を払ったらいくらも残らなかったで京都〔安原は当時京都居住〕行きは暫時中止だが、何処かで調達する勇気が起これば、ゆくことになるだろう」とかといった、気遣いをする中也像を容易に見つけることができる。安原への中也の手紙のすべては『中原中也全集』に収められているが、『全集』の無機質な手紙の羅列と大岡の解説からは、そうした気遣う中也像は発見しがたく、酷薄な中也像のみが印象に強く残る。

中也が安原に表わしたようなこまやかな感情は、おそらく文学とは無縁だと判断した安原などにのみ示したのかもしれないものの、大岡をはじめとする文学関係者たちが中也の感情を受容するその仕方にも問題があった。そうだとすれば大岡が次のように書いている(31)中也の姿も別のイメージで捉える必要がある。

昭和三年五月父が死んだ時、彼は帰省しなかった。これは彼が当時家へは大正十五年以来日本大学へ行っていることになっていたが、実は入学さえしていなかったのも、母から着て帰るように指定された学生服を持っていなかったという実際的な理由があったのであるが、私は別に彼の父に対する感情の或る厳しいニュアンスを認めることができるように思う。「父が死んだからといって、子が葬式に帰らなければならないという理由はない」と彼は書いてきたそうである。彼はランボーに倣って「人でなし中也」と署名することもできたろう。

中也と父の関係について大岡は、次のように記す(32)。

彼がよく話した一つの挿話があるが、それによると或る時父が病気で離室（はなれ）に寝ていた時、母屋で制止をきかず弟と騒いでいる彼を、父は裸足で中庭の敷石伝いに叱りに来たが、その手には一枚のハンケチが握られていて、父はそれで子供たちを打って帰って行ったそうである。

彼によれば父の厳格さは内心の優しさを隠す仮面なのであった。

現実の父謙助の子供たちへの叱責は厳格をきわめた。思郎は次のように記す(33)。

それに比べると父の懲罰は神経にきた。応接間の床（とこ）の上に面壁させて坐ら

安原喜弘『中原中也への手紙』
(2000年2月・青土社)

せるのである。ある時、来客が床を眺めて、本物の置物と見まちがえ「実に生きてるような彫像ですナ」と感嘆したことがある。絶対に動いてはならないのである。時間がたつと足がしびれてくる。ちょっとでも体を動かすと、足のかかとに激烈な刺戟が加わる。煙管（きせる）につめたタバコの火を当てられるのである。うしろからやられるから全く不意打で、子供は飛び上がる。すると父は「動くなッ！」と咆える。かかとに残ったタバコの火がじりじりと神経の奥まで焼いてくる。現在も残っている床の間の壁の爪跡は、面壁折檻の苦痛に耐えかねた子供らの悲鳴の記念である。面壁折檻を最も多くうけたのは、やはり長男の中也である。

罰の最大のものは納屋の中に一晩中禁錮するものであるが、弟たちが一度か二度くらいしか納屋禁錮を受けていないのに比べて、中也は何十回となく閉じこめられている。

中也はおそらく自己の内にある「ハンケチ」で打つ父親像と、現実の「タバコ」で折檻する父親像との間のどこに、自分がなろうとする父親像つまり「家長」像を置くべきなのかに迷い続けたに違いない。現実の中也は自分の子供にもオロオロするし、かつての愛人長谷川泰子が一介の学生との間につくった子にも、少しの金があれば玩具を買ってやろうとする、「ハンケチ」型の父親像を示す。だが、それは彼が本当になろうとした父親像と一致するかという疑問である。

中也にせよ、中也よりはるかに明確な「家」意識・「家長」意識を持っている大岡にせよ、それは「家」なり「家長」なりを明瞭に意識した上で形成したものではなく、あたかも空気の如く自然に吸いこんだ社会意識としての「家」・「家長」意識であった。大岡自らは、自らの自然発生的な「家」・「家長」意識にわざわざいされて、安定かつ継続的な収入を求めて会社づとめをするだけですむ。しかし、中也にしてみれば、大岡がそうした「家」・「家長」意識を無批判に受容し、それに順応しようとすることは、自分の側近に自分の「父」を見る思いであったに違いない。

詩人として自分の「生」に真摯であっただけ、その「生」を疎外する「父」大岡との対立は避けようのない展開であった。大岡は中原の剥き出しの「生」を「不幸」と捉え、「不幸を強制」されて中也から逃げ出した。しかしながら中也にしても、自らの内にもある「家」・「家長」の問題として「生」を捉える視点を欠いていた。大岡もまた同様に「生活態度」とはいうものの、当然そこに含まれている「家」・「家長」の問題として、正面から捉えようとはしなかった。

「家」・「家長」の問題が意味するところはきわめて多岐にわたる。最も端的なものは、中也の父謙助のような「家長」のあり方つまり家父長制は、幾重にも複合し累積して天皇制に結合する。その意味で明確な「家」・「家長」意識をもった大岡が、「第二乙種」でしかも35歳という年齢で召集を受け、戦地で俘虜にならざるを得なかったことに一種の暗合を認めざるを得ない。敗戦という暴力的な形で近代日本の「家」・「家長」・「天皇制」は解体させられたが、自らの力で解体したのでないことから生じるひずみは、現在の社会を特色付けているように思えるのである。

(2004年2月1日)

〔一の注〕

- (1) 岡井隆「悪魔の伯父さん」〔『新文芸読本・中原中也』(1991年2月・河出書房新社) 122頁・初出『ユリイカ』1974年9月号〕。岡井隆には『中原中也研究』(1975年6月・青土社)がある。
- (2) 多田富雄「中原中也の不在証明」〔『ユリイカ』(2000年6月号・青土社)〕42頁。
- (3) 井川博年「私の中の中原中也」〔『国文学―解釈と教材の研究―』(2003年11月・学燈社)〕128頁。
- (4) 第1次＝小林秀雄・河上徹太郎・大岡昇平・阿部六郎・安原喜弘・中村稔編『中原中也全集』全三巻(1951昭和26年4月～6月・創元社)／第2次＝小林秀雄・河上徹太郎・大岡昇平・中村稔編『中原中也全集』全一卷(1960昭和35年3月10日・角川書店)／第3次＝大岡昇平・中村稔・吉田瀨生編『中原中也全集』全五巻＋別巻一卷(1967昭和42年10月～昭和46年5月・角川書店)／第4次＝大岡昇平・中村稔・吉田 生・宇佐美齊・佐々木幹郎編『新編・中原中也全集』全五巻＋別巻(2000平成12年3月～・角川書店)。
- (5) 最も入手しやすい中也関連の書誌的情報は、中原中也記念館の「記念館所蔵資料」<http://www.city.yamaguchi.yamaguchi.jp/bunka/etc/chuya/>である。
- (6) 吉田瀨生「主要文献解題」〔『現代詩読本1・中原中也』(1978年7月・思潮社)〕295頁。
- (7) 桑原幹夫「中原中也研究史展望」〔日本文学資料刊行会編『中原中也・立原道造』(1978年7月・有精社)〕278頁。
- (8) 桑原幹夫(7)279頁。
- (9) 青木健編著『年表作家読本 中原中也』(1993年1月・河出書房新社)203頁。
- (10) 福島泰樹は、「雪の宵」〔『大岡昇平全集18・月報4』(1995年1月・筑摩書房)〕7頁に、存命時の伊藤拾郎から聞いた話の要約として、次のように記している。

戦地から最初に復員したのは私〔拾郎〕でした。ついで思郎が帰り、二十一年の二月に呉郎が帰ってきます。呉郎は長崎医大を出てましたから聴診器ひとつで「中原医院」を開業するんです。父の跡を継いでくれたっていうんで母は大変喜んでました。呉郎の助手として私も手伝います。リュックサックにゲートル姿の大岡先生が見えられたのはその頃でした。

呉郎と私は診療室で寝起きしてましたから、母屋の思郎がお世話をしました。配給米の時代でしたので、〔思郎の〕夫人の美枝子さんが酒の心配だとかに気を配っていました。大岡さんは、中也がランボーを翻訳した、あの茶室で仕事をなさっておられた。思郎が中也に興味を持つようになったのも、『兄中原中也の祖先たち』〔正しくは『兄中原中也と祖先たち』〕が長い年月をかけて書かれるに至ったのも、大岡さんにあのとき言われたからなんです。

このように語った伊藤拾郎は、「兄〔中原中也〕たちが奏でるハーモニカの音色に魅せられ、幼いころから演奏に熱中。サラリーマン生活を終えてから、本格的に練習に励み、プロのハーモニカ奏者としてデビューした。東京を中心とした単独コンサートや、ミュージカル『42丁目のキングダム』への出演、CD発売など、演奏家として活躍した。また、中也没後66年を生き、兄の思郎や呉郎と共に中也を語り続けてきた」と紹介されている。

(http://www.sunday-yamaguchi.co.jp/event/2003/2003.07/27ito_juro.html「Web版サンデー・山口」『中也の末弟を紹介「追悼 伊藤拾郎展」』)

- (11) 大岡昇平「中原中也の読まれ方」〔『大岡昇平全集』第18巻(1995年1月・筑摩書房)〕521頁。
- (12) 大岡昇平「在りし日、幼かりし日」〔『大岡全集』第18巻〕307－308頁。
- (13) 大岡昇平「中原中也の『帰郷』について」〔『大岡全集』第18巻〕491頁。
- (14) 中原思郎「はしがき」〔『中原中也ノート』(1978年10月・審美社)〕3頁。
- (15) なお、フク、思郎、呉郎、拾郎ともに故人である。その死去年次は、次のようである。

- ・1975（昭和50）年6月12日 呉郎没（56歳）。
- ・1980（昭和54）年11月12日 フク没（101歳）
- ・1982（昭和57）年2月14日 思郎没（68歳）
- ・2003（平成15）年3月19日 拾郎没（85歳）

ちなみに大岡昇平は1988（S63）年12月25日に78歳で没しており、いかなる場合も中也に忠実であったと評された中也の友人の安原喜弘は、1992（平成4）11月4日に84歳で没している。

(16) 中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は 一わが子中原中也を語る―』（初出：1973年10月・講談社）。本稿は講談社文芸文庫本（1998年6月）を使用した。67頁。

(17) 中原中也「詩的履歴書」（「我が詩観」の一部）〔『中原中也全集』第3巻（1967年12月・角川書店）〕139頁。

(18) 大岡昇平「中原中也 ― 揺籃」〔『大岡全集』第18巻〕37頁。

(19) 中原フク述(16)67頁。

(20) 中原中也「三歳の記憶」（『在りし日の歌』の一部）〔『中原全集』第1巻（1967年10月・角川書店）〕168・169頁。

(21) 大岡昇平(18)42-43頁。

(22) 大岡昇平(18)41頁。

(23) 大岡昇平(18)45頁。

(24) 中原中也「一つの境涯」〔『中原全集』第3巻〕374-375頁。

(25) 中原中也(24)375-376頁。

(26) 中原フク述(16)99、102、103頁。

(27) 大岡昇平「解説〔中原中也『山羊の歌・在りし日の歌』（現代名詩選）〕」〔『大岡全集』第18巻〕57頁。

(28) 大岡昇平「中原中也『在りし日の歌』」〔『大岡全集』第18巻〕489頁。

〔二の注〕

(1) 大岡昇平「中原中也の思い出」〔『大岡昇平全集』第18巻（1995年1月・筑摩書房）〕14頁。

(2) 大岡昇平「中原中也の読まれ方」〔『大岡全集』第18巻〕521頁。この部分で大岡は(1)の「中原中也の思い出」を中也について「はじめて書いた」ものといい、敗戦の翌年つまり1946年の執筆であるとしている。中也について2番目に書いたのが「中原中也伝 ― 揺籃」であり、1947年に書いたが「載せてくれる文芸雑誌はなかった」ために、1949年まで発表できなかったとする。実際には『大岡全集』第18巻によれば、1947年8月出版の創元社版『中原中也詩集』は大岡の編集で、同書に中也について「解説」と「年譜」を書いているのが最初である。第2は1948年8月に雑誌『風雪』に中也と富永太郎の京都時代について書いた。第3は1948年10月に『創元月報』に中也の短歌について書いたものである。第4が(1)であり、第5、第6は中也とランボーに関するもので、「中原中也伝 ― 揺籃」は第7作にあたる。引用部分は、大岡昇平「中原中也伝 ― 揺籃」〔『大岡全集』第18巻〕50頁。

(3) 中原中也「少年時」（『山羊の歌』所収）〔『中原中也全集』第1巻（1967年10月・角川書店）〕64・65頁。

(4) 吉田瀬生「作品別『山羊の歌』『在りし日の歌』解釈資料」〔吉田瀬生編『中原中也必携』（1981年3月・学燈社）〕77頁。

(5) 大岡昇平「富永の死、その前後」（『朝の歌』の一部）〔『大岡全集』第18巻〕89頁。同書725頁によれば、初出は1956年3月発行の『別冊文芸春秋』である。

- (6) 村上護『中原中也の詩と生涯』(1979年10月・講談社)は、「都会人と田舎者」という項を立てて167頁から178頁にわたりこの問題を論じている。その168頁・169頁。
- (7) 大岡昇平(1)13頁。
- (8) 大岡昇平(1)15頁。
- (9) 大岡昇平「白痴群」(『朝の歌』の一部)〔『大岡全集』第18巻〕181頁。
- (10) 大岡昇平「(創元社版『中原中也詩集』)解説」〔『大岡全集』第18巻〕4頁。(2)に述べたように実際にはこれが大岡が中也について論じた最初の作品である。
- (11) 大岡昇平(1)12頁。大岡がこれを中原中也について書いた第1作としていることについては、(2)参照。
- (12) 大岡昇平「思い出すことなど」。初出は1979年8月発行の『中原中也必携』[(4)]。〔『大岡全集』第18巻〕561頁。
- (13) 大岡昇平「『中原中也全集』〔第四巻〕解説」〔『大岡全集』第18巻〕396頁。
- (14) 大岡昇平(13)397頁。
- (15) 大岡昇平(13)399頁。
- (16) 大岡昇平「思想」(『朝の歌』の一部)〔『大岡全集』第18巻〕141頁。
- (17) 大岡昇平「京都における二人の詩人」(『朝の歌』の一部)〔『大岡全集』第18巻〕72頁。
- (18) 大岡昇平(12)562・563頁。
- (19) 大岡昇平(12)567頁。
- (20) 『中原中也全集』第2巻(1967年11月・角川書店)248-253頁。
- (21) 大岡昇平(12)567頁。大岡はこう書きながら、続く部分で中也が『文学界』に「玩具の賦」を持ち込んだころ、6月末か7月初に青山二郎のところで、中也訳の『ランボオ詩抄』のの訳をめぐる中と喧嘩をしたことが原因かともいう。
- (22) 大岡昇平(13)396頁。
- (23) 以下の年譜はすべて大岡昇平「伝記年譜」〔『大岡昇平全集』第23巻(2003年8月25日・筑摩書房)〕605頁以下による。
- (24) 以上はあくまで(23)の「伝記年譜」と大岡の中也に対する諸論考を読んだ限りでの大岡に対する「予感」であり、大岡には『父』(1951年)・『母』(同)・『叔母』(1965年)など肉親を描いた作品や、『幼年』(1973年)、『少年』(1975年)など自伝に近い作品があるので、それらから改めて実証する必要がある。
- (25) 中原思郎「近い祖先 父」〔同『中原中也と祖先たち』(1970年7月・審美社)〕203頁以下。
- (26) 中原思郎「長兄」[(25)]23・24頁。
- (27) 中原思郎(26)24頁。
- (28) 大岡昇平「白痴群」(『朝の歌』の一部)〔『大岡全集』第18巻〕182頁。文中の島田清次郎『地上』については、私たちの年代では川口浩・野添ひとみによる映画『地上』(1957年作製・大映映画・吉村公三郎監督)の方が原作より強い印象がある。
- (29) 大岡昇平(28)181頁。
- (30) 中原思郎「空気銃」(25)70頁。
- (31) 大岡昇平「中原中也伝 一揺籃」〔『大岡全集』第18巻〕35頁。
- (32) 大岡昇平(31)32頁。
- (33) 中原思郎(26)21・22頁。